

# ごみの山に終わる華鬘の喩え

—第5三啓経の梵文テキストと和訳—

松田和信 出本充代 上野牧生  
田中裕成 吹田隆徳

## 1. まえがき

三啓経 (tridaṇḍa) は阿含經典の前後をアシュヴァゴーシャ (馬鳴) 作品の偈で挟み込んだ読誦文献である。チベットのポカン寺に伝えられた『三啓集 (Tridaṇḍamālā)』の梵文写本には40種の三啓経が含まれているが、そのうち、第26三啓経の『毒蛇経 (Āśīviṣa)』(雑阿含1172経) について、アシュヴァゴーシャ作品偈も含む梵文テキストに和訳を附して1年前の本誌前号に発表した<sup>1)</sup>。これは三啓経の最初の全文出版である。その後、同じメンバーで読み進んだ三啓経が第5三啓経であった。第5三啓経を取り上げた理由は、先に読んだ第26三啓経と内容的に類似し、両方とも人の身体を主題としている。第26三啓経を読んだ知識があれば、解読はさほど困難ではないと思われたからである。しかしその予想は外れた。該当箇所の写真の状態が万全ではなく、解読は困難を極めた。その結果、解読をあきらめた3箇所を残さざるを得なかった。ただ、それによって本稿全体を放棄するより、第5三啓経が今後の仏教研究に資する貴重な梵文原典資料であることは論を俟たないことから、可能な限り解読と復元に正確を期してここに公表する次第である。なお第26三啓経と異なり、第5三啓経に用いられた阿含経の経名は不明であるため、經典に含まれるフレーズから本稿のタイトルを採った。

---

1) 松田和信・出本充代・上野牧生・田中裕成・吹田隆徳2022。

## 2. 第5三啓経の内容

40種の三啓経とその構造については本稿末の参考文献に挙げた松田とイエンス＝ウヴェ・ハルトマン（Jens-Uwe Hartmann）の論稿を参照していただきたい。ここで取り上げる第5三啓経は、三啓経の基本に従い、第1ダンダの21偈と第3ダンダの15偈によって第2ダンダの阿含經典を挟み込む構成となっている。その内容構成を示せば以下の通りである。

### 第1ダンダ

- 第1-3偈 三帰依偈
- 第4-20偈 アシュヴァゴーシャ作品偈（出典不明）
- 第21偈 經典導入偈

### 第2ダンダ 阿含經典（未同定）

### 第3ダンダ

- 第1-13偈 アシュヴァゴーシャ作品偈（出典不明）
- 第14-15偈 ブッダの教えを讃える定型偈

第2ダンダの阿含經典についてはパーリ・ニカーヤにも漢訳阿含にも対応經典は見出されない。これは〔根本〕説一切有部教団の現存しない『増一阿含（*Ekottarikāgama*）』に含まれる一經典であった可能性があるように思われるが、詳細については後で述べる。三帰依偈および經典導入偈を除いた第1ダンダの17偈と、ブッダの教えを讃える定型の2偈を除いた第3ダンダの13偈の、計30偈が何らかのアシュヴァゴーシャ作品から借用された偈であると考えられる。ただし、これらの偈は既存のアシュヴァゴーシャ作品には全く見出されない。そこでは数種の韻律が駆使されているが、特に第1ダンダの偈は多彩である。これまでに公表された『三啓集』の偈では、いくつかの証拠を上げて、このような偈はすべてアシュヴァゴーシャの失われた『莊嚴經論（*Sūtrālamkāra*）』の偈であると推定したが、残念ながら、第5三啓経の偈には、その文体や使われた単語以外にそれを証明する証拠は存在しない。ただ、第3ダンダの第1偈については、『ウダーナヴァルガ』の注釈書である漢訳『出曜経』の中で、馬聲（馬鳴）が昔説いた偈として引用されていることが明らかとなっている<sup>2)</sup>。

なお、重要な梵文資料としては、第1ダンダ末の經典導入偈（第21偈）から經典を経て、第3ダンダ第8偈までを含むウイグル語と梵語のバイリンガル紙写本断片がドイツのトルファン写本コレクション中に存在する（登録番号TM441）。この断簡は、ウイグル語部分も含めてすべてトルファンのブラーフミー文字で書かれている。10世紀以降に書写された写本と思われるが、第5三啓経の梵文を短文あるいは単語毎に取り出し、それにウイグル語訳を附した文献である。第5三啓経が後代まで書き継がれ、それがウイグルの地にまで伝えられていたとは驚きである。この断簡のローマ字転写自体は未同定のまますでに1954年にドイツから刊行されていたが（von Gabain 1954:30-37）、最近ハルトマンによって、それが第5三啓経の梵語・ウイグル語のバイリンガル断簡であることが同定された<sup>3)</sup>。この断簡は第5三啓経の梵文写本を解読する上でも大いに参考になる。

さらに第1ダンダ末の刺血写経譚を説く經典導入偈（第21偈）については、『月燈三昧経（*Samādhirāja-sūtra*）』の複数の梵文写本の冒頭部に附された偈文集の中に同一偈が存在する<sup>4)</sup>。また刺血写経の物語をめぐる諸資料については本稿第5節で紹介する。『月燈三昧経』写本冒頭部の偈文集に含まれる偈の多くは『三啓集』の偈、すなわちアシュヴァゴーシャ作品偈と共通する偈であるが、それについては別稿を期したい。經典導入偈自体がアシュヴァゴーシャ作品偈である可能性は低いと思われるが、アシュヴァゴーシャが創作したと信じられていた多くの偈がインド世界の様々な人々に伝承され、様々な局面で借用して使われていたことを物語る一例である。

### 3. 梵文テキストと和訳

梵文テキスト（Ms. 7r5-10r1）では、代用アヌスヴァーラを元に戻し、子音の重複を削除あるいはその逆を行うなど、写本に見られる読みを正規形に断り

2) 本稿注24参照。松田和信2022b。

3) ハルトマンはウイグル語の専門家とともにこの断簡を新たに出版する。Hartmann, Jens-Uwe & Maue, Dieter. Forthcoming.

4) これについては第21偈の翻訳箇所参照。



輪 (prabhāmaṇḍala) を持ち、蓮華のように開いた目と月のような顔と蜂 (bhṛṅga) の腹 (aṅga) のような髪をしており、インドラやブラフマンやクベーラやマーラの冠 (mukuta) によって触れられた蓮華 (ambuja) の足をしており、正法 (saddharma) の光線 (raśmi) という鉉脈 (ākara) もてる聖者 (muni) にして、汚れを離れたブツダ (仏) という日輪 (divākara) に私は帰命する。

tasmād buddha(7v1)divākarāt sumahato vidyāvīkīrṇaprabhād

ye saddharmagabhastayo vyanusṛtā dīvyanti sarvā diśaḥ |

tair<sup>6)</sup> loko 'yam ajasram eva śayitaḥ sambodhyate tattvato

yaṃ buddhvā praśamaṃ prayānti munayo dharmāya tasmai namaḥ || 5.1.2 || (Śā)

明知 (vidyā) によって拡散された光もてるその偉大なるブツダという日輪から放たれた、あらゆる方角に光輝く正法 (saddharma) の光線 (gabhasti) によって、常に眠っているこの世間は本当に (tattvatas) 目覚めさせられる。それを悟って牟尼たちが寂滅に向かうところのダルマ (法) に私は帰命する。

yat tair eva tathāgatārkavisṛtaiḥ sambodhitaṃ śrūyate

śīlaghrāṇasugandhi sacchucidalaṃ bodhyaṅganālaṃ śu(7v2)bham |

dhyānārūpyaviśuddhaśītalajalaṃ nirvāṇasatkarnīkaṃ

vistīrṇaṃ bhuvi saṅghapaṅkajavanaṃ bhaktyā samabhyarcaye || 5.1.3 || (Śā)

如来という日輪 (arka) によって放たれたそれらの〔光線〕によって目覚めさせられたと伝えられる、戒という芳香 (ghrāṇa) が香り、〔八〕正〔道〕 (sat) という清らかな (śuci) 葉 (dala) があり、〔七〕覚支という茎 (nāla) があり、清浄で、〔四〕禅 (dhyāna) と〔四〕無色〔定〕 (ārūpya) という冷水 (śītalajala) があり、涅槃という正しい (sat) 苞 (karnīkā) のある、大地の上のサンガ (僧) という広大な蓮の森 (paṅkajavana) に敬愛 (bhakti) をもって私は帰命する。

dhātubhyo hi caturbhyaḥ sarpebhya ivaikabhājanagatebhyaḥ |

bhavati ya eva kruddhaḥ sa eva doṣāvaho bhavati || 5.1.4 || (Āryā)

一つの器にいる〔四匹の〕蛇の如く、〔身体の中にある〕四つの界 (dhātu) の中から〔一つの界でも〕怒り出せば、それは必ず〔人に〕損害 (doṣa) をもたらすものとなる。

6) Ms. yair.

adhruvam asukham anātmakam aśucim asāraṃ kṛtaghnam avidheyam |  
yo vetti kāyam aham iti mameti (7v3) ca sa<sup>7)</sup> vañcito bhramati || 5.1.5 || (Āryā)  
不堅固で、安楽ではなく、アートマンを持たず、不浄で、実質なく、背恩のも  
ので、従順ならざる身体 (kāya) を「私である。我が物である。」と考える人  
は迷い彷徨う。

kṛmikulaśatanīḍe duḥkhayantre kṛtaghne  
vyasanaśaraśatānām lakṣyabhūte ca nityam |  
navabhir aśucimārgaiḥ syandamānair ajasraṃ  
saghrṇa iha śarīre ko rametātra dhīmān<sup>8)</sup> || 5.1.6 || (Mā)  
百の虫の集団 (kṛmikula) の巢 (nīḍa) であり、苦しみの機械 (yantra) であ  
り、背恩のもの (kṛtaghna) であり、常に百の不幸の矢 (vyasanaśara) の標的  
(lakṣya) となり、絶えず流れ出る九つの不浄の道 (九穴) によって嫌悪の対  
象となる (saghrṇa) この身体を、賢者の誰がここで楽しめよう。

salilaphenasame vikṛte 'śucau  
maraṇadharminī rogajarāśraye |  
asati kāyakalau kṛtanāśake  
katham ihā(7v4)rhasi sajjayituṃ manaḥ || 5.1.7 || (Dru)  
水泡 (salilaphena) に等しく、変壊 (vikṛta) し、不浄 (aśuci) で、死を性質  
(maraṇadharmin) とし、病 (roga) と老い (jarā) のよりどころ (āśraya) で  
あり、虚偽 (asat) にして背恩 (kṛtanāśaka) のものである、この身体という  
汚濁 (kāyakali) に、あなたはどのようにして心 (manas) を愛着させてよいだろう  
か。

kāyam apāsyā yāti vivaśaḥ subhṛtam api yadā  
mārgam adaiśikaṃ pratibhayaṃ svacaritasahitaḥ |  
kiṃ prati<sup>9)</sup> kāyamaṇḍanaparo na carasi niyamaṃ  
vadhya ivābhighātasamaye paramabhayaḡataḥ || 5.1.8 || (Vaṃ)

7) Ms. vā sa.

8) Ms. dhīman\*.

9) この prati の機能は不明であるため、ここでは和訳していない。独立語ではなく、kāyamaṇḍanapara との複合語の一部として読むなら、「身体に対する装飾」(prati が無くても意味は変わらず、むしろ無い方が自然か) と「敵 (pratikāya) [である身体 (?)] の装飾」の二通りの解釈が可能であるが、いずれも説得力に欠ける。

人は自由を失って (vivaśa)、よく維持されていた (subhṛta) 身体さえも捨て、自分の行為 (svacarita) [だけ] を伴って案内人なき (adaiśika) 恐ろしい道を進んで行く。そのような状況で、なぜ、あなたは身体の装飾 (kāyamaṇḍana) にばかり熱心になって、制戒 (niyama) を行わないのか。[刀が] 振り下ろされる時になって、究極の恐怖に至る死刑囚 (vadhya) のように。

yasmād avairakupitaiḥ satataṃ viruddhair  
bhūtaiś caturbhir uragair iva sanniviṣṭaḥ |  
tasmād ayaṃ bahubhayaś ca (7v5) mahābhayaś ca  
valmīka ity abhihitaḥ sugatena kāyaḥ || 5.1.9 || (Va)

敵意がなくても (avaira) 怒り出し、絶えず (satata) あい争う (viruddha) 四匹の蛇 [に纏わりつかれる] ように、[四つの大] 種 (bhūta) に纏わりつかれているから、多くの恐怖と大きな恐怖のあるこの身体 (kāya) は、善逝によって蟻塚 (valmīka) であると説かれた。

yasmād anekasuśiraḥ kramaśaś ca vṛddho  
nānāvidhaiḥ kṛmikulair bahubhiś ca pūrṇaḥ |  
naikābhighātasulabhaś ca nirātmakaś ca  
valmīka ity abhihitas tata eṣa kāyaḥ || 5.1.10 || (Va)

無数の穴 (suśira) があり、順々に大きくなり、様々な種類の多くの虫の集団 (kṛmikula) に満たされているから、それゆえ、沢山の攻撃を受けやすく、アートマンなき (nirātmaka) この身体は蟻塚であると説かれた。

valmīka ity abhihito bhuvi mṛttikāyāḥ  
rāśir yathā kṛmiśarīraviniḥṣṭāyāḥ |  
bindus tathāya(8r1)[m aśuceḥ pitṛmātrjasya]  
--- [jaga]ti kāya iti prabuddhaḥ || 5.1.11 || (Va)

例えば、地面 (bhū) において、虫の身体 (kṛmiśarīra) から発生した土 (mṛttikā) の堆積 (rāśi) が蟻塚であると説かれるように、同様に、世間において、父と母より生じた不浄 (カララ) のしずく (bindu) が・・・ものが身体であると理解される<sup>10)</sup>。

ākṛtyā balavibhavana vā dhiyā vā

10) 写本写真の状態が悪く、第4パーダの4文字分が解読不能。「成長して大きくなった」というような意味が4文字で表現されているように思われる。

kartavyo na khalu vicakṣaṇena darpaḥ |

kālena svapiti hi cūrṇito dharāṇyām

valmīko madarabhasena hastineva || 5.1.12 || (Pra)

姿 (ākṛti) の点でも、力と財産 (balavibhava) の点でも、智慧 (dhī) の点でも、賢者 (vicakṣaṇa) は決して自慢 (darpa) してはならぬ。実に、時 (kāla) に砕かれた (cūrṇita) [身体] は地面 (dharāṇī) の上で眠りにつく。あたかも発情 (mada) で暴力的になった (rabhasa) 象 (hastin) によって [砕かれた] 蟻塚が [眠りにつく] ように。

ucchvāsam āśvasitam unmiṣitam nimeṣam<sup>11)</sup>

sthānaprayāṇaśayanāsanajam ca duḥkham |

kāyeṣu (8r2) [rūpiṣu niśāmya sadā prasahya]m

kaḥ kāyasaṃjñakam anartham imaṃ bhajeta || 5.1.13 || (Va)

息を出すこと (ucchvāsa) と、息を吸うこと (āśvasita) と、目を開くこと (unmiṣita) と、目を閉じること (nimeṣa) とを、さらにまた止まること (sthāna)、行くこと (pariyāṇa)、横たわること (śayana)、座ること (āsana) から生じた苦を、形ある身体において常に耐えねばならぬものであると認識すれば、身体と称されるこの無意味なものを誰が受け取るであろうか。

catvāraḥ pṛthivījalāgnipavanāḥ kāyāśritā dhātavaḥ

snānābhyañjanabhojanaprabhṛtibhis tais taiḥ sukhair lālitāḥ |

kiṃcic caiva vimānitā gataghrṇās tyaktvā ca sarvaṃ kṛtaṃ

ruṣṭā eva nipātayanty ativiṣāḥ sprṣṭā ivāśīviṣāḥ || 5.1.14 || (Śā)

身体をよりどころとする地 (pṛthivī) 水 (jala) 火 (agni) 風 (pavana) の四つの界 (dhātu) は、沐浴 (snāna) 塗油 (abhyañjana) 食事 (bhojana) 等のありとあらゆる安楽によって甘やかされる (lālita)。そして [四つの界は] 少しでも機嫌を損ねる (vimānita) と、容赦なく (gataghrṇa) すべての恩 (kṛta) を捨てて、怒って [人を] 殺害する。[身体に] 触れられて [怒った] 猛毒の (ativiṣa) 毒蛇 (āśīviṣa) たちが [人を殺害する] ように。

(8r3) --- ~ [vicāriṇāś ca yatayo] daṣṭā hi nāśīviṣaiḥ

daṣṭasyāpi ca kasyacin na maraṇaṃ mantrauśadhābhyām bhavet |

sarvatṛativāritais tu viṣamair anyonyamohātmakair

11) āśvasita = āśvāsa, unmiṣita = unmeṣa. 名詞として読む。



daṣṭam muhyati nopagacchati śamaṃ bhūtaiś caturbhir jagat || 5.1.15 ||<sup>12)</sup> (Śā)

また、・・・遍歴の (vicārin) 修行者 (yati) たちは毒蛇に咬まれるわけではない。たとえ誰かが咬まれても、呪文や薬草を使えば死に到ることはないであろう。しかし、どこにおいても防御されず、不正で、互いに迷妄 (moha) を本質とする四つの〔大〕種 (bhūta) に咬まれた世間は昏迷し、寂靜には到らない<sup>13)</sup>。

lakṣye yathā mahati yatnam ṛte 'pi muktāḥ  
kuntāḥ śilās ca viśikhās ca bhava(8r4)[nty amoghāḥ] |  
[śītoṣṇadamśamaśakoragaloṣṭada]ṇḍāḥ  
kāye tathā bahuvīdhā nipatanty anarthāḥ || 5.1.16 || (Va)

例えば、大きな標的 (lakṣya) に対しては、放たれた槍 (kunta) や石 (śilā) や矢 (viśikha) が難なく (yatnam ṛte) 命中する (amogha) ように、同様に、身体 (kāya) に対して、寒さ (śīta) や暑さ (uṣṇa) や蝨 (damśa) や蚊 (maśaka) や蛇 (uruga) や土塊 (loṣṭa) や棍棒 (daṇḍa) といった様々な不利益なものが降りかかる。

yadā śukrañ caitat pitur aśuci mātuś ca rudhiraṃ  
śarīraṃ sambhūtaṃ kramaśa iha bījād iva phalam |  
tvacā tanvyācchannaṃ prakṛtim anavekṣyāsyā saha-jām  
kathaṃ kāye rāgas tava bhavati saṃvin na bhavati || 5.1.17 || (Śi)

父の不浄な精液 (śukra) と母の血 (rudhira) がある時、種子から果実が〔生まれるように〕、この世で、順番に、薄い (tanvī) 皮膚 (tvac) に覆われた身体 (śarīra) が生まれる。その〔身体〕に生まれついた (sahajā) 本性 (prakṛti) を考慮せずに、どうしてあなたは身体 (kāya) に愛着 (rāga) し、正しく理解 (saṃvid) しないのか。

na darpāyāśnīyā(8r5)[n, na ca] ~ ~ ~ -- [na vapuṣe]  
śarīrasthityarthaṃ guṇavad aguṇaṃ vābhyavaharet |  
śarīraṃ hy āhāro niyatam iha dhatte 'nvayavaśād  
upastambho dattaś calaśithilamūle gr̥ha iva || 5.1.18 || (Śi)

12) Cf. 『毒蛇経』 26.1.9 & 10.

13) 写本写真の状態が悪く、第1パーダの4文字分が解読不能。どこか蛇の出そうにない場所を表す語、あるいは「蛇に用心する」といった形容詞が書かれていると想像できる。

人は自慢 (darpa) するために食べるべきではない。……のために、美容 (vapus) のために〔食べるべきでは〕ない。人は身体 (śarīra) の安定 (sthiti) のために、美味なもの (guṇavat) も不味いもの (aguṇa) も摂取すべきである。なぜなら、この世で食物は連結力 (anvayaśa) によって常に身体を維持するからである。揺れる (cala) 不安定な (śithila) 基礎をした家に補強用の柱 (upastambha) が与えられるように<sup>14)</sup>。

idam avaśam ajasraṃ bādhyamānaṃ śarīraṃ  
ripubhir iva himoṣṇakṣutpipāsājarādyaih |  
śakaṭam iva viśīrṇaṃ durbalaṃ naikarūpair  
(8v1) upakaraṇaviśeṣair<sup>15)</sup> dhāryate vāhyate ca || 5.1.19 || (Mā)

敵によって〔害される如く〕、寒さ (hima) 熱さ (uṣṇa) 飢え (kṣut) 渴き (pipāsā) 老い (jarā) などによって絶えず害される不自由なるこの身体 (śarīra) は、様々な形の特別な補助具 (upakaraṇaviśeṣa) によって担われ運ばれてゆく。あたかも力を失った壊れた荷車 (śakaṭa) が〔様々な形の特別な補助具によって担われ運ばれてゆく〕如し。

kasmāt prākṛtam eṣi yauvanamadaṃ tiṣṭhañ jarāyā<sup>16)</sup> mukhe  
kenārogyakṛto madas tava yadā rogāśrayā dhātavaḥ |  
kiṃ mohāt samupaiṣi jīvitamadaṃ mṛtyoḥ karāgre sthito<sup>17)</sup>  
magnasya vyasanatraye pratibhaye kasmān madās te trayah || 5.1.20 || (Śā)

老いの入口 (mukha) に立っているのに、なぜあなたは卑しい (prākṛta) 若さの驕り (yauvanamada) に向かうのか。〔四つの〕界 (dhātu) が病の拠りどころである時に、なぜあなたには無病によって作られた驕りがあるのか。死神

14) 写本写真の状態が悪く、第1パーダ後半部は解読不能。以下のような『サウンダラナンダ』第14章第14-15偈が同内容であり、解読の参考になるが、解読不能部分に対応すると思われる語は見当たらない。

evam abhyavahartavyaṃ bhojanaṃ pratisamkhyayā |  
na bhūṣaṇārthaṃ na vapuṣe na madāya na dṛptaye || 14.14 ||

dhāraṇārthaṃ śarīrasya bhojanaṃ hi vidhīyate |  
upastambhaḥ pipatiṣor durbalasyeva veśmanah || 14.15 ||

15) Ms. rūpaiḥ (8v1) rūpakaraṇaviśeṣair.

16) Ms. tiṣṭhaj jarāyā.

17) 『ブッダチャリタ』第20章第33偈に類似の表現 (mṛtyoḥ karāgre parivartamānaḥ) が見られる。同偈は Johnston 1935 には含まれないが、松田和信2023によって『三啓集』写本から梵文テキストが回収されている。

(mṛtyu) の手の先 (karāgra) に立っているあなたは、なぜ愚かにも命の驕り (jīvitamada) に向かうのか。恐ろしい〔老・病・死の〕三つの過患 (vyasana) に沈んだあなたに、なぜ三つの驕りがあるのか。

svāṅgād utkr̥tya carma pramuditahṛdayo yaś cakārāśu bhūrjaṃ  
svā(8v2)ṅgād eva pratīko rudhiram api maṣīm bandhujīvaprakāśam |  
saṃbhidyāsthi<sup>18)</sup> svadehāt sitarajatanibhām lekhanīm yaś ca cakre  
prāg bodheḥ sūktahetoḥ sa kila munivaraḥ sūtram etaj jagāda || 5.1.21 || iti || (Sra)

さとり (bodhi) 〔を開く〕前に、善説 (sūkta) 〔を書き写す〕ため、心歡喜して自分の体から皮膚 (carman) を剥ぎ取って直ちに樺皮紙 (bhūrja) を作り、物ともせず (pratīka)<sup>19)</sup>、自分の体からバンドウジーヴァ (午時花) 〔の花のように赤く〕輝く血 (rudhira)<sup>20)</sup>を〔抜き取って〕墨 (maṣī) を〔作り〕、自分の体から骨 (asthi) を折り取って白銀 (sitarajata) の如き葦筆 (lekhanī) を作ったと伝えられる牟尼の最上者は、この經典を説いた<sup>21)</sup>。

## 第2ダンダ (阿含經典)

§ 1 evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān chrāvastyāṃ viharati jetavane  
'nāthapiṇḍadasyārāme | tatra bhagavān bhikṣūn āmantrayate (8v3) sma ||

このように私は聞いた。あるとき世尊はシュラーヴァステイ (舎衛城) のジェータ (祇陀太子) の林、アナータピンダダ (給孤独長者) の園 (祇園精舎) に留まっていた。そこで世尊は比丘たちに言った。

18) Ms. saṃbhindyāsthi.

19) 下記注21で述べる『月燈三昧經』写本のその箇所では、この語は pravītaṃ と書かれている。pravītaṃ であれば「喜んで、進んで」の意味になると思われる。Ui-Bi 断簡はこの偈から始まるが、残念ながらこれに対応する語は拾われていない (von Gabain 1954: 30)。

20) バンドウジーヴァ (午時花, Pentapetes Phoenicea) の花は真昼に開花して翌朝には萎む。その花の色は血のように赤い。

21) 本稿の第2節で紹介したが、この偈は『月燈三昧經 (Samādhirāja-sūtra)』の梵文写本の冒頭部に附された偈文集の中に含まれる。松濤誠廉 1975: 273 および Dutt 1941: 6-7。松濤校訂では第33偈とする。この偈の内容と同様の物語については後述するが、ここで一例だけ挙げるなら、『大智度論』(大正25巻, 178c22-28) では次のような物語が紹介されている。「復次如愛法梵志、十二歳遍閻浮提、求知聖法而不能得。時世無佛佛法亦盡。有一婆羅門言。我有聖法一偈。若實愛法、當以與汝。答言。實愛法。婆羅門言。若實愛法、當以汝皮 (carman) 爲紙 (bhūrja)、以身骨 (asthi) 爲筆 (lekhanī)、以血 (rudhira) 書之、當以與汝。即如其言破骨剥皮以血寫偈「如法應修行 非法不應受 今世亦後世 行法者安隱 (Udānavarga 30.5)」。下線部のように偈と『大智度論』は単語が逐一对応している。

§2 tadyathā bhikṣava utpalamālā vā campakamālā vā 'timuktakamālā vā vārṣikīmālā vā 'ṅagatā vā vastragatā vā bhājanagatā vā teṣāṃ teṣāṃ rātriṃdivasānām atyayāt teṣāṃ teṣāṃ kṣaṇalavamuhūrtānām atyayāj jīryaty eva «mlāyaty eva» śuṣyaty eva | bhavati bhikṣavaḥ samayo yadāsāv<sup>22)</sup> utpalamālā vā campakamā(8v4)lā vā 'timuktakamālā vā vārṣikīmālā vā 'ṅagatā vā vastragatā vā bhājanagatā vā teṣāṃ teṣāṃ rātriṃdivasānām atyayāt teṣāṃ «teṣāṃ» kṣaṇalavamuhūrtānām atyayāj jīrṇā mlānā śuṣkā sarveṇa sarvaṃ saṃkārakūṭaparyavasānā bhavati |

「たとえば、比丘たちよ、ウトパラ (utpala, 青蓮華) の華鬘 (mālā) であれ、チャンパカ (campaka, 黄花樹) の華鬘であれ、アティムクタカ (atimuktaka, 善思花) の華鬘であれ、ヴァールシキー (vārṣikī, 茉莉花) の華鬘であれ、〔それらの華鬘が〕四肢に付けられたものであれ、衣に付けられたものであれ、器に盛られたものであれ、夜と昼がそれぞれ過ぎた後、クシャナとラヴァとムフルタ〔という時間の単位〕がそれぞれ過ぎた後、必ず衰え、必ず萎れ、必ず枯れる。比丘たちよ、この、ウトパラの華鬘であれ、チャンパカの華鬘であれ、アティムクタカの華鬘であれ、ヴァールシキーの華鬘であれ、〔それらの華鬘が〕四肢に付けられたものであれ、衣に付けられたものであれ、器に盛られたものであれ、夜と昼がそれぞれ過ぎた後、クシャナとラヴァとムフルタ〔という時間の単位〕がそれぞれ過ぎた後、衰え、萎れ、枯れ、すべてごみの山 (saṃkārakūṭa) に終わる時が来る。

§3 evam eva bhikṣavo 'yam api kāyo rūpī audārikaś cāturmahābhautiko mātāpitrasū(8v5)cikalalasaṃbhūta odanakulmāṣopacito nityocchadanasnapanaparimardana-bhedanavikiraṇavidhvansanadharmā | teṣāṃ teṣāṃ rātriṃdivasānām atyayāt teṣāṃ teṣāṃ kṣaṇalavamuhūrtānām atyayāj jīryaty eva mlāyaty eva śuṣyaty eva mriyaty eva | bhavati bhikṣavaḥ samayo yadāyaṃ kāyo rūpy audārikaś cā(9r1)turmahābhautiko mātāpitrasūcikalalasaṃbhūta odanakulmāṣopacito nityocchadanasnapanaparimardanabhedanavikiraṇavidhvansanadharmā | teṣāṃ teṣāṃ rātriṃdiva«sā»nām atyayāt teṣāṃ teṣāṃ kṣaṇalavamuhūrtānām atyayāj jīrṇo mlānaḥ śuṣko mṛtaḥ sarveṇa sarvaṃ śmaśānaparyavasāno bhavati |

まったく同様に、比丘たちよ、有色で、粗大で、四大種よりなり、母と父の不浄 (āsuci)・カララ (kalala) から生まれ、飯と粥によって養われ、常に塗油

22) Ms. yadasārv.

(ucchadana) 沐浴 (snapana) 按摩 (parimardana) 破壊 (vikarāṇa) 分解 (vidhvansana) の性質のあるこの身体も、夜と昼がそれぞれ過ぎた後、クシヤナとラヴァとムフルタ〔という時間の単位〕がそれぞれ過ぎた後、必ず衰え、必ず萎れ、必ず枯れ、必ず死ぬのである。比丘たちよ、有色で、粗大で、四大種よりなり、母と父の不浄・カララから生まれ、飯と粥によって養われ、常に塗油・沐浴・按摩・破壊・分解の性質のあるこの身体は、夜と昼がそれぞれ過ぎた後、クシヤナとラヴァとムフルタ〔という時間の単位〕がそれぞれ過ぎた後、衰え、萎れ、枯れ、死んで、すべて死体捨て場 (śmaśāna) に終わる時が来る。

§4 mṛtasya khalu (9r2) bhikṣavaḥ kālagatasya jñātayaḥ kāyam agninā vā dahanti |  
udake vā plāvayanti | pṛthivyām vā nikhananti | vividhā vā tiryagyonigatāḥ prāṇino  
bhakṣayanti | vātātapābhyām vā pariśoṣaṃ parikṣayaṃ paryādānaṃ gacchati | yat  
punar idam ucyate cittam iti vā | mana iti vā | vijñānam iti vā | tad dīrgharātraṃ  
śraddhāpari(9r3)bhāvitam śīlaśrutatyāgaprajñāparibhāvitam ūrdhvagāmi bhavati  
viśeṣagāmy āyatyām svargopagam || idam avocad bhagavān ||

じつに、比丘たちよ、死者 (mṛta, kālagata) の親族 (jñāti) たちは、身体を火で焼くか、水に流すか、地中に埋める。あるいは様々な畜生種の生き物たちが〔身体を〕喰うであろう。あるいは〔身体は〕風と熱とによる干涸らび (pariśoṣa) 断滅 (parikṣaya) 滅尽 (paryādāna) に至る。一方、「心 (citta)」あるいは「意 (manas)」あるいは「識 (vijñāna)」と言われるものは、長夜にわたって、信 (śraddhā) に満たされ (paribhāvita)、戒 (śīla) と聞 (śruta) と捨 (tyāga) と慧 (prajñā) に満たされる (paribhāvita) なら、来世 (āyati) には、上に進み (ūrdhvagāmin)、殊勝に進み (viśeṣagāmin)、天界に至る (svargopaga)。」

世尊はこの〔経典を〕説き終わった。

### 第3ダンダ

kāyasya maṇḍanavidhau kim asi prasakto  
mohena na prayatase kuśalakriyāsu |  
ācchidya neṣyati yadainam anityatā te  
dhātṛī kumārakam ivāṅkabhujopagūḍham<sup>23)</sup> || 5.3.1 || (Va)

23) Ui-Bi: ivāṅdha-

なぜあなたは身体を飾る行為 (maṇḍanavidhi) に執着して、愚かにも善行 (kuśalakriyā) に邁進しないのか。無常〔の力〕 (anityatā) があなたのその〔身体を〕引き離して連れて行こうとしているのに。乳母 (dhātrī) が横腹に腕で赤ん坊を抱いて〔連れて行く〕ように<sup>24)</sup>。

vastrānnapānaśaya(9r4)[nāsanasatkṛto 'pi  
snānānulepanavibhūṣaṇa]lālito 'pi |  
kāyo hi nāyam akṛtajñatayā<sup>25)</sup> paratra  
yāntaṃ muhūrtam api kañcid anuprayāti || 5.3.2 || (Va)

着物や食べ物や座臥具でもてなしても、沐浴や塗香や装飾品で甘やかしても、この身体は、忘恩の性質あるゆえ、誰であれ〔来世に〕向かう人 (yāt) に一瞬たりとも付き従って行くことはない。

yaḥ prāpya durlabham imaṃ kṣaṇasannipātam  
śreyo na cintayati kāyam avekṣamāṇaḥ<sup>26)</sup> |  
rājyābhiṣekam iva rājasuto 'pahāya  
svārtham tam<sup>27)</sup> eva ca sa kāyam apāsya yāti || 5.3.3 || (Va)

〔人趣という〕この得難い機会を得ても、身体を慮って、より重要なもの (śreyas) を考えない人は、自分の目標 (svārtha) とその同じ身体を捨てて去ってゆく。王子が〔一番重要な〕即位式 (rājābhiṣeka) を捨てて〔去って行く〕ように。

(9r5) [śuśrūṣi]to 'pi guruvat sutavad bhṛto 'pi  
dṛṣṭo 'pi bandhur iva bhartṛvad arcito 'pi |  
kāyaḥ pahr̥tya capalaḥ kapivat prayāti  
tyaktvā kṛtaṃ skhalitam ekam amṛṣyamāṇaḥ || 5.3.4 || (Va)

師のように仕えられても、息子のように養育されても、親戚のように見なされても、夫のように尊敬されても、猿 (kapi) のように落ち着きのない身体は、攻撃されたら、為されたひとつの誤りも許さずに、〔人を〕捨てて去ってゆく。

dr̥ptātmanāñ ca mahatāṃ kulagarvitānām

24) この偈は『ウダーナヴァルガ』の注釈書である漢訳『出曜経』(大正4巻626a1-3)の中で、馬聲(馬鳴)が昔説いた偈として引用されるが、詳細については松田和信2022b 参照。

25) Ms. apikṛtajñatayā.

26) Ms. avekṣyamāṇaḥ.

27) Ms. svārthāntam. Ui-Bi: svārtham tad.

śāntātmanām api «ca» bhāgyanimīlitānām |  
ante 'paviddhabhujapādaśirodharāṇi  
sāmyaṃ prayānty uparatāni ka(9v1)ḍevarāṇi || 5.3.5 || (Va)

有力で家系を誇る高慢な人々にとっても、幸福から〔目を〕閉ざした寂靜となれる人々にとっても、死の時には、腕や足や首が失われて静止した〔両者の〕身体は同じ状態（sāmya）になって行く。

vipro ghrṇī ca<sup>28)</sup> hi kulaśrutarūpadrptaś  
caṇḍāla eva ca jagatparivarjanīyaḥ |  
kālakrameṇa sahitau svapitaś<sup>29)</sup> citāyām  
evaṃvidhe jagati kasya bhaven nu darpaḥ || 5.3.6 || (Va)

家系（kula）や学問（śruta）や容姿（rūpa）を自慢する侮蔑的な婆羅門（vipra）も、世間に忌避されるチャンダラも、時の経過に伴われて〔両者とも、荼毘の〕薪の堆積の上で眠りにつく。このような類の世間では、誰が〔何を〕自慢できようか。

kiṃ karmaṇā daśavidhena śubhena labdhvā  
kāyan na kārayasi karma sukhe<sup>30)</sup> prasaktaḥ |  
anviṣyatām phalam itaś ca calād asārād<sup>31)</sup>  
vistīrṇaveta«na»bhṛtād bhṛtakā(9v2)d ivārthaḥ || 5.3.7 || (Va)

十種の善業によって〔今生における人趣の身体を〕得たのに、安楽に執著するあなたは、なぜ〔来世に楽果をもたらす〕業を〔あなたの〕身体に作らせないのでか。大きな報酬（vetana）によって雇われた使用人から利益が〔求められる〕如く、今生で揺れる不堅固な〔身体〕から〔来世の〕結果が求められるべきである。

yasmād amedhyanagarapratimaṃ<sup>32)</sup> śarīraṃ  
garbhe 'śucāv aśucinānnarasena puṣṭam |  
tasmād amedhyajalajātam ivāravindaṃ  
tyaktavyam eva viduṣā vapuṣāpi yuktam || 5.3.8 || (Va)

28) Ui-Bi: ghrṇīva.

29) Ui-Bi: śayitau.

30) Ui-Bi: kāma sukhe.

31) Ui-Bi: phalam itad asārād.

32) Ui-Bi: -naraka-.

汚物〔で満ちた〕都城 (amedhyanagara) に似た身体は、不浄なる母体の中で、不浄な食物と飲物によって育てられた。それ故、汚水の中に生じた蓮華 (aravinda) のように〔美しい〕容貌を備えていても、〔身体は〕智者によって捨てられるべきである。

saṃrakṣito 'pi sutavat paripālito 'pi  
snānāmbharābharaṇabhūṣaṇalālito 'pi |  
kāyo jahāti ca vihanti ca hanti caiva<sup>33)</sup>

tyaktvā kṛtaṃ subahu caura ivā(9v3)kṛtajñāḥ || 5.3.9 || (Va)

息子の如く守られても、保護されても、沐浴や着物や装身具の装飾で甘やかされても、恩知らずの盗賊の如く、身体は多くの恩を捨て去り、放棄し、妨害し、破壊する。

saliladahanavātavyādhyariśvāpadebhyah  
suciram api śarīraṃ rakṣitaṃ bhedañāntam |  
diśati maraṇakāle tāpam aprāptasāraṃ

nihitam iva parakyaṃ vastram āchchidyamānam || 5.3.10 || (Mā)

水 (salila) や火 (dahana) や風 (vāta) や病 (vyādhi) や敵 (ari) や猛獣 (śvāpada) から長く守られても、身体は断滅 (bhedana) に終わり、死の時に〔人は〕肝心な物を得られなかったという苦痛 (tāpa) を呈する。保管していた (nihita) 他人の (parakya) 衣が奪い取られる時に〔苦痛を呈する〕ように。

sulabhakuśaladharmā saṃpadaṃ nāśayitvā  
viśayasukhanimittam prerito yena kāyah |  
pravaram aguru dagdhvā taṇḍulaprasthahetoḥ  
śabarajana (9v4) ivājñāsaṃ tapyate 'sau hatārthaḥ || 5.3.11 || (Mā)

善 (kuśala) を容易く得られる性質 (dharma) の身体を、〔善の〕成就 (saṃpada) を消滅させて、対境 (viśaya) の安楽〔を得る〕ために駆り立てる人は、財産 (artha) を失って苦しむ。無知な野蛮人 (śabarajana) が、米一升 (taṇḍulaprastha) 〔を炊く〕ために最高の沈香 (aguru) を燃やしてしまっ〔て苦しむ〕ように。

paramasukham ahāryam śāntam utsrjya mārgam  
viśayasukham anāryam mārgate yah śramaṇa |

33) Ui-Bi: vihaṃti caiva.



sa bhavati parihīṇaś cāvahāsyāś ca loke

malinam iva kuvāstraṃ rañjayan kuṅkumena || 5.3.12 || (Mā)

最高に安楽で、奪われず、寂靜なる道を捨てて、徒勞にも、非聖なる対境の安楽を求める者は、退化した者となって、世間において嘲笑されるべきものとなる。汚れた粗末な服を〔高価な〕サフラン (kuṅkuma) によって染めている人が〔世間において嘲笑される〕ように。

na carati niyamaṃ yaḥ kāyavairūpyabhīrur

jvalitam iva davāgniṃ prekṣamāno<sup>34)</sup> 'pi mṛtyum |

sva(9v5)piti sa iha dagdhaḥ svārtham aprāpya bālaś

camara iva davāgnau vṛkṣalagnāgravālaḥ || 5.3.13 || (Mā)

燃え上がった山火事を〔目の当たりにする〕ように、死を目の当たりにしながら、身体の醜い変化を恐れて禁戒を行じないなら、その愚者は、自分の目標を得ることなく、ここで焼かれて眠る。山火事の際に、毛先 (agravāla) が木に絡まったヤク (camara) が〔逃げ遅れて焼け死ぬ〕ように。

### ブツダの教えを讃える定型偈<sup>35)</sup>

yāvad dhaṃsāṃśakundasphaṭikamaṇiśīlācāru<sup>36)</sup> cāndraṃ vimānaṃ

yāvad dīptāṃśujālaṃ praviṣṭakiraṇaṃ cāpi sauraṃ vimānaṃ |

tāvat prajñogradhāraṃ daśabalamukhajaṃ dhārmikaṃ dharmacakraṃ

trṣṇāvallīsamutthaṃ vividhabhayakaraṃ lokadu(10r1)ḥkhaṃ chinattu || 5.3.14 || (Sra)

ハンサ鳥の肢体 (haṃsāṃśa) やジャスミンの花 (kunda) や水晶石 (sphaṭikamaṇiśīlā) の〔ように白く〕美しい (cāru) 月輪の (cāndra) 車 (vimāna) が〔天空に〕ある限り、燃え立つ光の網 (aṃśujāla) 持ちて光線 (kiraṇa) を放つ日輪の (saura) 車が〔天空に〕ある限り、十力持てるお方 (daśabala) の口から生まれ、法 (dharma) になつた、智慧 (prajñā) という強靱な (ugra) 刃 (dhārā) 持てる法輪 (dharmacakra) が、渴愛 (trṣṇā) の蔓草 (vallī) より生じた様々な恐怖を作る (bhayakara) 世間の苦しみを根絶やしにせんことを。

34) Ms. prekṣyamāno.

35) 定型偈の置かれ方と形式については前稿 (松田和信・出本充代・上野牧生・田中裕成・吹田隆徳2022) n. 63, n. 64 参照。

36) Ms. dhansānsakunda-

yānīha bhūtāni samāgatāni  
sthitāni bhūmāv atha vāntarīkṣe |  
kurvantu maitrīm satataṃ prajāsu  
divā ca rātrau ca carantu dharmam || 5.3.15 || (Upa)

地上に住む者であれ、空中に住む者であれ、ここに集まった有情たちは常に生類に慈しみをなせ。昼も夜も〔ブツダの〕法 (dharma) を行はずべし。

#### 4. 第2ダンダの阿含経について

どれほど美しくても、どれほど芳しくても、時が経つと華蔓 (mālā, 花飾り) は枯れ果て、最後はごみの山 (saṃkārakūṭa) に終わる。それと同じように、どれほど外見を飾り立てようとも、どれほど健康に努めようとも、身体はやがて老いて病み、最後は死体捨て場 (śmaśāna) に終わる。そうした結末にはいかなる例外も存在しない。色とりどりに人々の眼を楽しませる華鬘を譬喩にしながら、この経典は、誰もが避け得ない死という現実を聞く者に認識させる。本経は、漢訳阿含とパーリ・ニカーヤに対応する経典は見出せないが、ヴァスバンドゥ (世親) が著した経典解釈論の『釈軌論 (Vyākhyāyukti)』第2章と、それに対するグナマティ (徳慧) の注釈に第2節と第3節が全文引用され<sup>37)</sup>、ヤショーミトラ (称友) の俱舍論注釈書 (*Sphuṭārthā*) 第3章 (世間品) には第4節が引用されている<sup>38)</sup>。このような引用例から判断して、この経典が〔根

37) 『釈軌論』第2章は、阿含の中から任意に抽出された103例の経句について、ヴァスバンドゥがその語義を注釈する、いわば語義解釈の見本を示す内容を持つ。第2章は堀内俊郎2016によって全訳が公刊されている。103例の出典については、堀内俊郎2016: 218-220に一覧が提示されていて、わずか3例が出典不明と記されている。これは堀内俊郎氏が情報探査・収集力にいかに卓越しているかを物語っている。その不明3例中の第84番がこの経典である (該当箇所は堀内俊郎2016: 165-166)。なお、同じく「不明」と記されている第29番については、松田、堀内、上野が個人的に情報交換する中で〔根本〕説一切有部の梵文『長阿含 (*Dīrghāgama*)』の第18経 (*Māyājāla-sūtra*) が出典であると確認することができた。従って、出典が確認されていない経句はあと一例、第24'番のみである。

38) Wogihara 1932-1936: 303.32-304.2: yathoktaṃ. mṛtasya khalu kālaṃ gatasya jñātaya imaṃ pūtikāyam agninā vā dahaṃti udake vā plāvayanti bhūmau vā nikhananti vātātapābhyāṃ vā pariśoṣaṃ parikṣayaṃ paryādānaṃ gacchati. yat punar idam ucyate. cittam iti vā mana iti vā vijñānam iti vā śraddhāparibhāvitam śīlatyāgaśrutaprajñāparibhāvitam. tad ūrdhvaḡami bhavati viśeṣagāmy āyatyāṃ svargopagam iti. これは十二支縁起の名色支が解説される箇所引用される経文である。ただし山口益・舟橋一哉1955: 253, 255, n. 8が指摘するように、本節は

本) 説一切有部の阿含に含まれる一經典であったことに疑いはない。その上で、近年発見された梵文『長阿含 (*Dīrghāgama*)』および漢訳の『中阿含 (*Madhyamāgama*)』と『雑阿含 (*Samyuktāgama*)』といった〔根本〕説一切有部系の阿含類に一致する經典が存在しないことから、この經典は梵文でその一部しか現存しない〔根本〕有部の『増一阿含 (*Ekottarikāgama*)』に含まれる經典であった可能性が最も高いように思われる。ただ、經文の中に『増一阿含』の特徴である法数を説く要素が直接的には見受けられないことから、現時点で確実に『増一阿含』の一經典であると断定することはできず、今後の資料発見あるいは研究の進展を俟つほかはない。なお、説一切有部系とは見なされない漢訳『増一阿含』にも対応經典は存在しない。

『釈軌論』とその注釈では、この經典の本文が長文に互って引用される代わりに、その箇所では、他の經文に比して短い語義の注釈が与えられるだけである<sup>39)</sup>。經典そのものが十全にその教説を語り得ているため、殊更に語義解釈を重ねる必要はないとのヴァスバンドウの判断かもしれない。事実、第2節と第3節の主題は、色彩鮮やかな華鬘を身体に喩える明快な教説である。かかる譬喩に関して言えば、第3節に説かれる「有色で、粗大で、四大種よりなり、母と父の不浄・カララから生まれ、飯と粥によって養われ、常に塗油、沐浴、按摩、破壊、分解の性質のあるこの身体」との説示は、我々が前稿で取り上げた第26三啓經第2ダンダの『毒蛇經』第7節と逐語的に一致する<sup>40)</sup>。さらに第1ダンダの第9偈から第12偈の4偈は身体を「蟻塚 (*vālmika*)」に喩えて説くが、これもヤショーミトラによって『俱舍論』世間品の注釈に際して引用される『蟻塚經』に関連する偈である可能性が高い<sup>41)</sup>。『蟻塚經』も『毒蛇經』と同様に、比喻を教義的な語で「言い換え (*adhivacana*)」で説示する形式の經典である。

*Samyutta-Nikāya* 55.21、漢訳『雑阿含』930經などにも平行句が認められる。従って、正確を期すと、ヤショーミトラがいずれの經典から本節を引用したかは不明である。

39) 堀内俊郎2016: 165-166参照。

40) 松田和信・出本充代・上野牧生・田中裕成・吹田隆徳2022: 61-62.

41) Wogihara 1932-1936: 281.6-8、山口益・舟橋一哉 1955: 133。この經句のパラレルは多く、*Majjhima-Nikāya* 23 (*Vammika-sutta*); 施護訳『仏説蟻喩經』(大正95番, 金子芳夫・小山一行・羽矢辰夫1995: 243f.); 『雑阿含』1079經; 『増一阿含經』39.9經; 『別訳雑阿含經』1.18經。第5三啓經第1ダンダの第9-12偈は『蟻塚經』の趣意を韻文として表現したものか。

譬喩によって身体の無常と無意味さを語るという点で、これらの経典は主題を共有しているといえる。

## 5. 第1ダンダ第21偈の刺血写経譚について

第2ダンダの阿含経典に先立つ第1ダンダの最終第21偈は、覚りを開く前の過去世において、自身の皮膚を用紙に、血を墨に、骨を筆にして善説を書き留めるといふ行いを紹介して、偉大なブツダを讃える経典導入偈である。このような自身の血によって書き写した経典は、皮膚や骨まで用いられたわけではなからうが、「刺血写経」や「血字経」と呼ばれ、中国や日本において実際にそのような写経行為が行われた記録や、血で書き写された写経自体も残されている<sup>42)</sup>。

さらに、刺血写経については、すでに複数の仏教聖典にその物語が見出され、『梵網経』『大般涅槃経（曇無讖訳）』『大智度論』『賢愚経』『四十華嚴』などに典拠があると指摘されている（平野顕照1977, 船山徹2002）。その中で、特に『四十華嚴』と『梵網経』が中国における刺血写経の実践に強く影響を与えた文献であるとの指摘（Kisechnick 2000）に対して、村田みお氏はその不備を指摘して、『四十華嚴』や『梵網経』ではなく、『賢愚経』や『大智度論』に見られる本生譚（ジャータカ物語）として登場する刺血写経譚が中国の刺血写経文化に強い影響を与えた文献であることを指摘した（村田みお2013）。また岡田真美子氏は、施身聞偈研究の一端として、インド成立のジャータカ類における刺血写経譚について収集と分析を行い、刺血写経の物語が現存するインド語文献からは回収できないこと、およびこの物語を含む漢訳文献も、翻訳が5世紀前半に集中していることを指摘し、その登場人物から樂法王子を主人公とする『華手経』系の物語と、ウツラ仙人を主人公とする『集一切福德三昧

---

『蟻塚経』を解釈するアシュヴァゴーシャの失われた『莊嚴経論』の該当箇所に含まれる偈が出典である可能性がある。

42) 村田みお2013: n.3 は『金剛般若経』の刺血写経（敦煌写本 S5451, S5669, P2867. 当該写本の研究については同2013: n.4参照）などの、中国や日本に現存する刺血写経を紹介する。また、袁輪頌量2021: 9 は江蘇省蘇州市内にある西園戒幢律寺に血で書写された八十卷『華嚴経』が保存されていることを紹介する。

経』系の物語が存在することを明らかにした（岡田真美子（真水）2017）。

さて、第5三啓経の第1ダンダ第21偈では、菩薩の名前や状況が全く紹介されず、いずれの文献に基づいてこのような偈が創作されたかは不明である<sup>43)</sup>。岡田真美子氏の論攷では、今述べたように、刺血写経を取り扱ったインドの説話は存在しないと指摘されているが<sup>44)</sup>、今回発見された第1ダンダ第21偈は初のインド語（梵語）による刺血写経譚であり、この偈の発見によって、刺血写経譚で用いられる複数の単語の原語が確定できたことには一定の価値があると言える。なお注意すべきは、第21偈で皮膚を剥ぎ取って用紙とする時の紙は貝葉（*tālapattra*）ではなく、樺皮（*bhūrja*）の語が用いられている点である。これは偈の作者が貝葉の原材料であるターラ椰子の育たない中央アジアを含む北部インドを活動の拠点としたことを物語っているように思える。あるいは、単に皮膚の類推で、貝葉ではなく樹皮である樺皮の語を用いた可能性もあろうが、中インドや南インドでは樺皮が仏典書写に用いられる文化はなかったはずであるから、いずれにしても、この偈に採用された物語は北部インドの文化に依っているとと言えるのではないか。

三啓経は、何らかのアシュヴァゴーシャ作品から阿含經典を挟み込む偈を借用し、体裁を整えるために編纂者が三帰依偈や經典導入偈をそれに追加して成った読誦用の文献であると推定される。第21偈は經典導入偈であるから、第5三啓経の編纂時に編纂者が新たに作成した偈であった可能性が高い。無論、40種の三啓経の經典導入偈の中には、アシュヴァゴーシャ作品から取られた可能性のある偈が一切存在しないとは断定できないが、刺血写経譚は鳩摩羅什以前の文献から回収できず、羅什訳『集一切福德三昧経』のウッタラ仙人本生

43) 第21偈には「心歡喜して自分の体から皮膚を剥ぎ取って」云々と、自身を犠牲にして刺血写経を喜んで行っている描写が見られる。このような描写は、刺血写経物語を説く経論の中で『賢愚経』のウッタラ仙人の物語にのみ確認することができる。「是時鬘多羅、聞此語已、歡喜踊躍、敬如來教、即剥身皮、析取身骨、以血和墨。（大正4卷351b22-24）」。

44) 岡田真美子（真水）2017では刺血写経譚だけではなく、雪山童子説話のような施身聞偈説話そのものがインド語原典に存在しないことが指摘されている。この点については、ごく最近になって本稿共著者の出本充代によって、ドイツのトルファン写本中に存在する雪山童子本生譚の一部と見られる梵文写本断片が紹介されている（Demoto 2021: 33-36）。雪山童子物語の源流も確実にインド文献に遡るのである。

譚では、刺血写経の物語が確認できるものの、鳩摩羅什に先立つ竺法護（239-316）による異訳の『等集衆徳三昧経』ではこの物語は説かれていない<sup>45)</sup>。このことから、インドにおいてジャータカ文献の中に刺血写経の物語が登場したのは竺法護以後、羅什以前の4世紀頃であるとみなされる。この物語を經典導入偈として説く第5三啓経が編纂された年代を考える上で、この事実には留意しておくべきであろう。

## 6. 最後に ——何が来世に行くのか——

この世に人間として生まれた者は、人間の身体を伴って来世に天界や地獄に行くわけではない。そもそも天界にも地獄にも人間は存在しない。その境界固有の有情が棲息しているだけである。では身体（*kāya*, *śarīra*）をこの世に捨てて、何が来世に向かうのか。無論、それがアートマンであるとは口が裂けても言えない。第2ダンダに置かれた阿含経の第4節では、それを「心（*citta*）あるいは意（*manas*）あるいは識（*vijñāna*）と言われるもの」と表現する<sup>46)</sup>。第5三啓経は身体の無常と身体が無意味な存在であることをテーマとしていると思われるが、身体が今生で終わる時、一体何が来世に輪廻するのか。今生と来世をつなぐものは何か。この經典の教説に対してアシュヴァゴーシャ作品偈ほどのような解釈を与えているのであろうか。

その点に注意して第5三啓経に配されたアシュヴァゴーシャ作品偈を読むと、不思議なことに気づく。第5三啓経では第1ダンダの偈は専ら身体が無意味な存在であることを説き、第3ダンダの偈によって何が来世に行くかを解説する。例えば、第3ダンダ第2偈では「この身体は・・・誰であれ〔来世に〕向かう人に一瞬たりとも付き従って行くことはない」と言い、第3偈では「人は・・・身体を捨てて去ってゆく」と言う。第2偈では来世に向かう存在を「向かう」という現在分詞形で示すだけであり、第3偈では動詞の主語は書かれていない。三人称単数形の動詞が置かれているだけである。両偈とも「人」

45) 岡田真美子（真水）2017: 135の「モチーフ比較表」を参照。

46) *Nidānasamyukta* の第7経にも同様の表現が見られる（*Tripāthī* 1962: 115-121）。

という語を補って訳すほかはない。

一方、身体を主語とする文章では、はっきり主語が書かれている。たとえば、第4偈では「身体は・・・[人を]捨てて去ってゆく」と言う。ただし、この偈でも「捨てて」という絶対詞の目的語は書かれておらず、「人」という目的語を補って訳すほかはない。つまり、アシュヴァゴーシャは輪廻の主体となる存在に具体的な単語を当てることはなく、いかなる言質も与えない。その存在を間接的に表現するだけのように見える。意図的にそうしたというほかはないであろう。これは何を意味しているのでしょうか。この表現は説一切有部教団の教義上からどう解釈されるのか<sup>47)</sup>、有部教団の教義と合致しているのでしょうか。ここでは結論じみたことは何も書けないが、アシュヴァゴーシャの輪廻観、さらには仏教の輪廻観を考える上で第5三啓経が重要な原典資料のひとつになることは間違いないであろう。

〈参考文献〉

- Demoto, Mitsuyo** (出本充代). 2021. “Sanskrit Fragments of Saṃghasena's *Bodhisattvāvadānamālā*.” *South Asian Classical Studies* (南アジア古典学) 16: 1-50.
- Dutt, Nalinaksha**. 1941. *Gilgit Manuscripts*, Vol. II. Srinagar-Kashmir.
- Feer, Léon**. 1898. *Samyutta-Nikāya*, vol. V, London, The Pali Text Society.
- Gabain, Annemarie von**. 1954. *Türkische Turfan-Texte VIII; Texte in Brāhmīschrift*, Akademie Verlag, Berlin.
- Hartmann, Jens-Uwe**. 2022a. “Trauer um die Großmutter und Trost vom Buddha: Das *Āryikā-sūtra*.” *Connecting the Art, Literature, and Religion of South and Central Asia; Studies in Honour of Monika Zin*, eds. Ines Konczak-Nagel, Satomi Hiyama and Astrid Klein, New Delhi, DEV Publishers & Distributors: 153-160.
- 2022b. “The (Re-)Appearance of the “Discourse on the Salt River” (*Kṣāranadī-sūtra*).” *Guruparamparā. Studies on Buddhism, India, Tibet and More in Honour of Professor Marek Mejer*, eds. Katarzyna Marciniak, Stanisław Jan Kania, Agata Bareja-Starzyńska and Małgorzata Wielińska-Soltwedel. Warsaw: 145-157.
- **Forthcoming 1**. “Forms of Intertextuality and Lost Sanskrit Verses of the *Buddhacarita*: the *Tridaṇḍaka* and the *Tridaṇḍamālā*.” *Festschrift for Gregory Schopen*, eds. D. Boucher and S. Clarke.

47) 説一切有部教団のオーソドックスな教義では、来世に向かう存在は中有 (antarābhava) とされ、それは五蘊である。楠本信道2007: 64-70参照。

- **Forthcoming 2.** “A Composite Manuscript from Qizil (SHT 191) and the *Tridaṇḍamālā*.” *Studia Indica. Festschrift Duan Qing*, eds. Ye Shaoyong, Zhang Xing and Fan Jingjing.
- Hartmann, Jens-Uwe & Matsuda, Kazunobu. Forthcoming 1.** “The Case of the Appearing Poet: New Light on Aśvaghōṣa and the *Tridaṇḍamālā*.” *Buddhakṣetrapariśodhana: Festschrift for Paul Harrison*, in *Indica et Tibetica*, eds. Charles DiSimone and Nicholas Witkowski, Marburg.
- **Forthcoming 2.** “Possible Fragments of Aśvaghōṣa’s Lost *Sūtrālaṃkāra* from the “Manuscript Cave” in Šorčuq.” *Festschrift for Eli Franco*. eds. Hiroko Matsuoka, Shinya Moriyama and Tyler Neil.
- Hartmann, Jens-Uwe, Matsuda, Kazunobu & Szántó, Péter-Dániel. 2022.** “The Benefit of Cooperation: Recovering the *Śokavinodana* Ascribed to Aśvaghōṣa.” *Dharmayātrā: Felicitation Volume in Honour of Venerable Tampalawela Dhammaratana*, ed. Mahinda Deegalle, Paris, Nuvis Press: 173-180.
- Hartmann, Jens-Uwe & Maue, Dieter. Forthcoming.** “Ein sanskrit–uigurisches Fragment der *Tridaṇḍamālā* in Brāhmī-Schrift Reedition des Texts TT VIII D.” *Acta Asiatica Varsoviensia*.
- Hartmann, Jens-Uwe, Wille, Klaus & Zieme, Peter. 2022.** “Aśvaghōṣa’s *Buddhacarita* in the Old Uigur Literature.” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University for the Academic Year 2021*, Vol. 25: 173-189.
- Johnston, E. H. 1928.** *The Saundarananda of Aśvaghōṣa*, Oxford University Press.
- **1935.** *The Buddhacarita: Or, Acts of the Buddha, Part I - Sanskrit Text*, Calcutta, Baptist Mission Press.
- **1936a.** *The Buddhacarita Or, Acts of the Buddha, Part II: Cantos i to xiv translated from the Original Sanskrit Supplemented by the Tibetan Version Together with an Introduction and Notes*, Calcutta, Baptist Mission Press.
- **1936b.** “The Buddha’s Mission and last Journey: *Buddhacarita*, xv to xxviii”, *Acta Orientalia*, 15, 1936: 26-111 & 231-292.
- Kisechnick, John. 2000.** “Blood Writing in Chinese Buddhism.” *Journal of International Association of Buddhist Studies*, Vol. 23-2: 177-194.
- Matsuda, Kazunobu. 2022.** “Sanskrit Text of the *Śivapathikāsūtra* in the *Madhyamāgama*.” *Guruparamparā. Studies on Buddhism, India, Tibet and More in Honour of Professor Marek Mejer*, eds. Katarzyna Marciniak, Stanisław Jan Kania, Agata Bareja-Starzyńska and Małgorzata Wielńska-Soltwedel. Warsaw: 321-327.
- Trenckner, V. 1888.** *The Majjhima-Nikāya*, vol. I, London, The Pali Text Society.
- Tripāṭhī, Chandrabhāl. 1962.** *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, Akademie - Verlag, Berlin.



- Wogihara, Unrai. 1932-1936. *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, Tokyo, Publishing Association of Abhidharmakośavyākhyā.
- 上野牧生 2015 「アシュヴァゴーシャの失われた莊嚴經論」『インド論理学研究』8: 203-234.  
——— 2020 「第29三啓經（八難經）の梵文テキストと和訳」『仏教学セミナー』111: (21)-(46).  
——— 2021 「増一阿含の二經典 (1) —第30三啓經（五事經）の梵文テキストと和訳—」『大谷学報』101-1: (1)-(28).  
——— 2022 「増一阿含の二經典 (2) —第36三啓經（不堅經）の梵文テキストと和訳—」『大谷学報』102-1: (1)-(16).
- 上野牧生・松田和信 2021 「アシュヴァゴーシャからヴァスヴァンドウへ——釈軌論と俱舎論に見る法滅観と馬鳴の詩作品——」『仏教学セミナー』113: (51)-(72).
- 岡田真美子（真水）2017 「施身聞偈書写説話—善説を書き残す大乘菩薩の物語—」『印度学仏教学研究』66-1: (132)-(138).
- 金子芳夫・小山一行・羽矢辰夫 1995 『新国訳大蔵經 阿含部3 長阿含經 III 尸迦羅越六方礼經 他』東京, 大蔵出版.
- 楠本信道 2007 『俱舎論における世親の縁起観』京都, 平楽寺書店.
- 平野顕照 1977 「刺血写經について」『書論』10: 186-195.
- 船山徹 2002 「捨身の思想—六朝仏教史の一断面—」『東方學報』74: 358-312.
- 堀内俊郎 2016 『世親の阿含經解釈—『釈軌論』第2章訳註—』東京, 山喜房佛書林.
- 松田和信 2019 「三啓集 (*Tridaṇḍamālā*) における勝義空經とブツダチャリタ」『印度学仏教学研究』68-1: 1-11.  
——— 2020a 「ブツダチャリタ第15章「初転法輪」—梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』25: 27-44.  
——— 2020b 「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ—如来十号論に埋め込まれた莊嚴經論—」『印度学仏教学研究』69-1: (53)-(61).  
——— 2021a 「不浄観を説く中阿含139經—三啓集から回収された梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』26: 63-81.  
——— 2021b 「大智度論におけるアシュヴァゴーシャ—戒論に埋め込まれた莊嚴經論—」『印度学仏教学研究』70-1: (61)-(69).  
——— 2022a 「アシュヴァゴーシャ・アンソロジー—鳩摩羅什訳文献に見られる馬鳴の詩作品—」『佛教大学仏教学部論集』106: 19-36.  
——— 2022b 「出曜經と大智度論共通の馬鳴偈について」『印度学仏教学研究』71-1: (45)-(53).  
——— 2023 「ブツダチャリタ・アンソロジー—失われた詩を梵文三啓集写本に求めて—」『佛教大学仏教学部論集』107: 65-84.
- 松田和信・イェンス・ウヴェ＝ハルトマン 2022 「灰河經（雜阿含1177經）の梵文原典と和訳—〔附〕原型カンギュルのチベット語訳テキスト—」『仏教学セミナー』116:

(1)-(30).

松田和信・出本充代・上野牧生・田中裕成・吹田隆徳 2022 「毒蛇の喩え—第26三啓経の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』27: 47-78.

松濤誠廉 1975 「梵文月燈三昧経」『大正大学研究紀要』60: 244-188 (一 - 五七)

袁翰顕量 2021 「仏教にみる奇書—刺血写経」『アジア研究図書館』2: 7-9.

村田みお 2013 「血字経の淵源と意義」、『中国思想史研究』34: 187-207.

——— 2020 『教えを信じ、教えを笑う』第一章「写経と仏画—わが身で表す信仰」シリーズ実践仏教4, 京都, 臨川書店.

山口益・舟橋一哉 1955 『俱舍論の原典解明 世間品』京都, 法藏館.